

One's Way 構文についての覚え書き

長原 和子

1. はじめに

英語には、概略(1)のような構造を持つ one's way 構文が存在する。(2)は言語資料の中で観察された one's way 構文の例である。(邦訳は静山社発行松岡佑子訳ハリー・ポッターシリーズに拠る。)

(1) 主語+動詞+ one's way +前置詞句 / 副詞

(2) a. The giant squeezed his way into the hut, stooping so that his head just brushed the ceiling. (HPSS p. 47.) (大男は窮屈そうに部屋に入ってきた。身を屈めても、髪が天井をこすった。)

b. Tom the innkeeper put three tables together in the parlor, and the seven Weasleys, Harry, and Hermione ate their way through five delicious courses. (HPPA p. 63.) (宿の亭主のトムが食堂のテーブルを三つつなげてくれて、ウィズリー家の七人、ハリー、ハーマイオニーの全員がフルコースのおいしい食事をつぎつぎと平らげた。)

c. Several fat brown chickens were pecking their way around the yard. (HPCS p. 32.) (丸々と太った茶色の鶏が数羽、庭で餌をついばんでいた。)

(2a)における his way, (2b)と(2c)における their way はそれぞれ統語的には、動詞の直接目的語の位置に現れているが、squeezed と his way, ate, pecking と their way の意味関係は通常の動詞とその直接目的語との意味関係とは大きく異なっている。(3)においては、squeezed の直接目的語の位置に現れている男性を押し込んだという意味であるが、(2a)においては、大男が押し込んだものは、直接目的語の位置に現れている his way ではなく、自分の体である。

- (3) They lowered him gradually into the cockpit. Somehow they squeezed him in the tight space, and strapped him in (*Cobuild English Dictionary*)

また、(2b) と (2c) の ate, pecking は他動詞として直接目的語を取ることができる動詞であるが、ate の意味上の目的語は前置詞句に現れている five delicious courses であり、pecking の意味上の目的語は餌であって、いずれの場合においても統語構造上現れている their way ではない。このように意味構造を反映していない統語構造を持つ one's way 構文は、(2) の one's way 構文に対応する多様な邦訳からも推測されるように、日本人英語学習者にとっても興味深い構文であるが、言語研究者にとってもその意味解釈の仕組みをどう考えるかが重要な研究テーマの一つになっている。(Jackendoff (1990), Goldberg (1995), 影山・由本 (1998) 参照)。

本稿では、意味解釈の仕組みを考えていく際に考慮する必要となる one's way 構文にはどのような特徴があるのかという問題を先行研究を紹介しながら考察する。この分野では一番包括的な先行研究である高見・久野 (1999a), (1999b), (1999c) を紹介し、彼らの仮説を支持する例文が、調査した言語資料に存在することを示すことにする。

2. one's way 構文の特徴

高見・久野 (1999a: 129) は、Maranz (1992), Levin and Rapoport Horav (1995) 等が主張している one's way 構文に課せられる制約を (4) のように要約している。

- (4) Way 構文に課せられる非能格性制約: Way 構文には、非能格動詞のみ現れ、非対格動詞は現れない。

高見・久野 (1999a: 128-129) に拠れば、非能格動詞は、意図的に事象に係わる行為者を主語に取る自動詞 (例えば talk, walk, smile, skate) と非意図的な生理現象を表し、経験者を主語に取る自動詞 (例えば belch, breathe, sleep, hiccough) である。一方、非対格動詞は、意図を持たずに受動的に事象に係わる対象を主語に取る自動詞 (例えば burn, sink, tremble, slip), 存在や出現を表す自動詞 (例えば exist, hang, emerge, happen) とアスペクト動詞 (例えば begin, start, end) である。高見・久野 (1999a: 131) は、(5) のように非能格動詞である walk, jump, fly が現れていても不適格な例文を示し、(4) の制約だけでは、言語事実が正しく説明できないことを示している。

- (5) a. *He walked his way to the store.
b. *The kid jumped his way into the sandbox.

さらに、高見・久野 (1999a: 132) は、制約 (4) の予測に反して (8) のように非対格動詞が現れていても適格な例文を示し、制約 (4) は正しくないことを主張している。

- (6) a. The avalanche rolled its way into the valley.
b. Rainwater trickles its way to the underground pool.
c. The driftwood floated its way to the south shore of the island.

以上の考察から、高見・久野 (1999b: 217) は、制約 (4) に代わるものとして制約 (7) を提案している。

- (7) Way 構文に課される機能的制約：Way 構文は、
(i) (ありきたりのものではない) 物理的、時間的あるいは心理的距離が存在し、
(ii) 主語指示物が、独自の様態で
(iii) その距離全体を徐々に移動し、
(iv) 動詞がその移動の様態を表す
場合にのみ、適格となる。

制約 (7) によって、(5) の不適格性がどのように説明されるかをみていくことにする。まず、(5a) においては主語指示物が店までというありふれた距離を移動しているので、制約 (7) の (i) を満たさず不適格になる。一方 (8) は主語指示物である僧侶が国中というありきたりでない距離を歩いているので、制約 (7) の (i) に述べられているありきたりでない物理的距離が存在しているので適格となることが説明される。

- (8) The priest walked his way across the country to protest nuclear arms. (高見・久野 (1999 b: 218))

また、(5b) が不適格な文であるのは、主語指示物が一度で砂場に飛び込んでいるので制約 (7) の (iii) を満たしていないためである。それに対し、主語指示物が繰り返し飛びながら砂場に向かっていることを表している (9) は、制約 (7) の (iii) を満たしているので適

格な文である。

- (9) The kid jumped his way to the sandbox. (高見・久野 (1999b: 221))

次に (10) のように非対格動詞が使われている不適格な文が、制約 (7) によってどのように説明されるかを見ていくことにする。

- (10) a. *The window opened / broke its way into the room. (高見・久野 (1999b: 221))
b. *Jill remained her way to a ticket to the show. (Ibid.)

高見・久野に拠ると、(10a) においては、窓は開いたり、壊れたりしただけで、ある距離を移動しているわけでもなく、また移動の独自の様態も示されていないので、制約 (7) の (ii), (iii), (iv) を満たさず、不適格となることが説明される。また、(10b) に現れている動詞 remain は、状態動詞なので徐々の移動や移動の様態を表すことができないので、(10b) は、(10a) と同じく制約 (7) の (ii), (iii), (iv) を満たさず不適格となる。

高見・久野はまた、Goldberg (1995: 212) が提案している制約 (11) によっても、主語指示物の自力での移動がない (12) の不適格性は説明できるが、同じように主語指示物の自力での移動がない (13) の適格性は説明できないと述べている。

- (11) 移動は自力で推進されなければならない。

- (12) a. *The wood burns its way to the ground. (Goldberg (1995: 212))
b. *The butter melted its way off the turkey. (Ibid.)

- (13) a. She walked along scuffing her feet, and the pebbles she dislodged slowly rolled their way into the ditch beside the road. (高見・久野 (1999c: 328))
b. When the car door flew open, all the balls rolled out onto the sidewalk. The soccer ball bounced its way into the street and the whiffle-balls landed in the gutter. (Ibid.)

一方、彼らが提案している制約 (7) では、(13) においては、主語指示物である小石もサッカーボールもいずれも移動しているので、制約 (7) の (iii) に違反していないが、(12) に

においては、材木もバターも前置詞句で指定された距離を移動している（移動した）という意味にはならない。従って制約（7）の（iii）に違反しているので、（12）の非適格性が説明される。

制約（7）は、制約（4）と異なり（12）に現れている burn や melt のような非対格動詞が one's way 構文に現れることを排除していない。従って burn や melt の主語指示物が移動している場合には、burn や melt でも one's way 構文に現れることを制約（7）は予測しているが、（14）はこの予測が正しいことを示している例文であると考えられる。

- (14) The Olympic flame is burning its way east on a river of Coca-Cola, which is sponsoring the torch relay. (*The New York Times*, May 19, 1996)

（14）において、オリンピックの聖火はそれ自身燃えながら移動しているので、制約（7）の（iii）に違反していないので、（14）の適格性が説明できることになる。また、（15）においても melt の主語指示物である原子炉の中心部が溶けながら移動したという解釈が正しいければ、（14）の場合と同様に（15）は、制約（7）の予測の正しさを示していると考えられる。

- (15) It was on one of the earliest of these ventures that investigators discovered a strange metallic stalagmite on the reactor's basement, the solidified remnants of the reactor core that had melted its way through several floors. (*The Observer*, March 26, 1995)

3. おわりに

以上考察してきたように、高見・久野では、one's way 構文は現れている動詞の特徴のみではなく、後続の前置詞句や副詞を含めた文全体の意味も考慮しなければ説明できない言語現象であることを主張している。（14）や（15）のような例文の存在は、彼らの分析の方向が基本的に正しいことを示していると考えられる。

例文出典

J. K. Rowling, *Harry Potter and the Sorcerer's Stone*. Arthur A. Levine Books, 1998.

J. K. Rowling, *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. Arthur A. Levine Books, 1999.

J. K. Rowling, *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. Arthur A. Levine Books, 1999.

参考文献

Goldberg, A. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The Uni-

versity of Chicago Press.

Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.

影山太郎・由本陽子 (1998) 『語形成と概念構造』東京：研究社出版

Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA: MIT Press.

Marantz, A. (1992) "The Way-Construction and the Semantics of Direct Object Arguments in English: A Reply to Jackendoff," in T. Stowell and E. Wehrli (eds.) *Syntax and Semantics 26: Syntax and the Lexicon*, 179-88. New York: Academic Press.

高見健一・久野 暲 (1999a) 「Way 構文と非能格性 (1)」『英語青年』第145巻第3号, 128-145

高見健一・久野 暲 (1999b) 「Way 構文と非能格性 (2)」『英語青年』第145巻第4号, 214-223

高見健一・久野 暲 (1999c) 「Way 構文と非能格性 (3)」『英語青年』第145巻第5号, 324-330